



# ふくしまオーガニック通信

～オーガニック・ランドふくしまをつくろう～

No. 24-4  
平成24年11月6日

農業総合センター有機農業推進室  
<http://www4.pref.fukushima.jp/nougyou-centre/>  
TEL (024) 958-1711

オーガニックふくしま安達・綿摘み取り体験で消費者との交流活動実施  
農業総合センター有機農業推進室

昨年から二本松市内の有機農業者ほ場で綿の栽培が開始されましたが、今年も農業者・綿取扱業者や消費者などを交えた摘み取り体験が10月21日に実施されました。

本年は戸沢地区（旧東和町）の2箇所のほ場で作付けされました。4月に安達地方有機農業者組織「オーガニックふくしま安達」が東京都内での消費者交流活動で種をまき、5月にほ場に定植、これまで育ててきました。

摘み取り体験当日は、綿の栽培と消費者交流活動を目的として設置された「オーダーメイド実証ほ」の仲里忍さんほ場及び同じオーガニックふくしま安達の柳瀬聡一郎さんほ場の2箇所で摘み取りが行われました。

作業は、仲里忍さんをはじめ農業者3名、福島市の綿取扱業者「わ田や」合同会社及び都内の染織業者・株式会社シオンテックの皆さん、福島市内のNPO法人などの皆さん、有機農業推進室の総勢10名で行いました。

まだ綿花がはじける前の状態のものも多かったため、枝ごと収穫して乾燥させ、改めて綿の部分のみを収穫することとしました。

翌日は会津方部の綿ほ場及び新潟方面の紡績工場の視察研修も行い、次年度へ向けた栽培技術の検討や綿の加工品の商品化、消費者交流活動の継続と様々なことが検討されています。



綿摘み取り体験風景①



綿摘み取り体験風景②

## 有機農業者組織3団体が農業総合センターまつりで有機農産物販売

農業総合センター有機農業推進室 会津農林事務所農業振興普及部

10月20日(土)・21日(日)の2日間、農業総合センターにおいて「第7回農業総合センターまつり」が開催され、「オーガニックふくしま安達」・「会津自然塾」・「喜多方ゆうきの和」の3団体が各々の有機農産物を販売しました。それぞれ丹精を込めて生産した有機農産物やジュース等の加工品を、来場された消費者の皆さんと交流を図りながら、販売を行っていました。

お米をはじめ、ダイコン、ニンジン、ネギ、サツマイモ、タマネギ、ジャガイモ等の定番品目の他、落花生、辛みダイコン、赤ダイコン、ヤーコンといった珍しい品目等、の有機農産物でブースがいっぱいとなりました。

来場者に有機農業を紹介するパンフレットを手渡し、有機農産物の安全性に加え、おいしい食べ方についても紹介しました。試食品を手渡すと、「とても美味しい!」と人気を集めるなど対面販売により交流が図られ、有機農産物や生産組織の取り組みを知っていただく良い機会となりました。特に、ネギやニンジンについては、大人気であったという間に無くなりました。

今回は出展にあたり、各生産組織では広報誌や宅配業務について資料を来場者に配付し、有機農産物のPRを行いました。



オーガニックふくしま安達



会津自然塾 (会津美里町)



喜多方ゆうきの和 (喜多方市)

## 有機農産物販路に係る意見交換会

～「喜多方ゆうきの和」「会津自然塾」中間実績検討会開催～

会津農林事務所農業振興普及部

去る9月11日、会津若松合同庁舎会議室において、「喜多方ゆうきの和」「会津自然塾」合同の中間検討会が開催されました。

今回は、出荷販売先である(株)ヴェルジェ(首都圏を中心に旬の野菜を取り扱う量販店)から川島商品部長と各店長7名が会津を訪れ、生産者と販売担当者との意見交換を行いま

した。

アドバイザーとして参加いただいた福島県普及指導協力委員の鈴木新（丸果会津青果株式会社代表取締役専務）さんや川島商品部長による販売情勢についてのお話を聞いた組織会員（23名）は、熱心にメモを取っていました。

川島部長からは「現在は一般野菜が安値傾向にあり、その結果、有機農産物の単価もそれに引きずられているが、『会津の贈り物』コーナーを設けて、しっかり対面販売し、PRさせていただいている。今後も、皆様の有機の農産物をしっかりと販売していきたい」との力強い言葉がありました。

生産者からは、「今後も有機農業を行う上で継続して栽培出来るような再生産価格として慣行栽培の単価に比べ50%増は必要である」と要望がありました。これに対して出席していた各店長からは、「社員一体となってお客様に会津の有機農産物を一番に販売させていただく」との決意の言葉がありました。

今後も情報交換を密に行いながら、品質の良い美味しい有機農産物を提供していくこと、さらに、自らが作った野菜がどのように売られているのか販売促進PR活動も兼ねての店舗訪問など、今後の方向性について確認しました。

次の日は、(株)ヴェルジエの各店長さんを現地に案内し、有機栽培の取り組みについて紹介しました。収穫したばかりの新鮮野菜を手にお互いが笑顔いっぱいの交流会となりました。



鈴木氏（左）と川島商品部長（右）

## 有機実証ほの紹介

### 《中通り》

### 農業総合センター有機農業推進室

#### <チャレンジ実証ほ 矢吹町大和内 芳賀 重蔵さん>

芳賀さんは、今までも野菜の有機栽培を行ってきましたが、今年からはブドウについても有機栽培を試みています。

ブドウの木は12年生で、品種は「紅伊豆」と「藤稔」の2品種です。ブドウは9月4日から出荷が始まり、9月末日までにほぼ終了しました。今年のブドウは、日照に恵まれたためたいへん甘く、「紅伊豆」の糖度は20度を示していました。出荷は、2kg箱（3～5房）のほか、房の形が悪いものは学校給食用に粒で提供しているそうです。

有機栽培の方法は、慣行栽培で使用しているホルモン剤のジベレリンを使わずに、その代わりに「バイオメジャー」という有機資材を使っています。「バイオメジャー」は、植物由来のサイトカイニンとインドール酢酸が主成分の資材で、作物の活性化を促すことが期待されます。

実際の果実の状態は、慣行栽培と比べて同じ房の中でも粒の大きさや成熟度のバラツキが大きいように感じました。しかし、これは資材の使用技術がまだ習熟していないためで、作業に慣れれば品質は向上するものと思われま



＜チャレンジ実証ほ 湯川村桜町 小久保八重子さん＞

落花生で有機栽培に挑戦！

小久保さんが代表をつとめる「あじさいの手」は、有志により村の農産物加工施設を利用して、凍みもちや米粉を使用したシフォンケーキ作りを行うなど村の特産品づくりに取り組んでいます。また、安全安心な農産物を栽培して、地元の直売所や各種イベント活動を通して販売を行っています。

以前から有機農業に高い関心を持っていた小久保さんは、今年から「あじさいの手」の仲間と共に、落花生の有機栽培に挑戦しました。

実証ほの作付面積は5aで、品種は「ナカテユタカ」を使用し、基肥として有機肥料の「いろどり有機」を導入、畝には雑草対策としてマルチングを行いました。

播種日は5月28日です。マルチ栽培を行ったことで、生育（発芽、開花後の子房柄伸長、肥大）は良好で、また栽培期間中の除草（手取り）は1回で済みました。さらにはほ場の周囲には、防虫ネットを設置したことで、害虫はほとんど見られませんでした。

10月3日に試し掘りを行ったところ、順調に子実が肥大しており、10月4日から収穫を行いました。

収穫した落花生は、乾燥調整後に喜多方市の菓子業者へ出荷することとなっています。さらに、村の農産物加工施設で「塩茹で落花生」として加工し、オリジナル商品として販売する予定です。

小久保さんは、栽培に取り組んでみて、大きな自信になったようです。来年の今頃は、転換期間中有機農産物落花生として販売できるように、有機JAS認証を目指すと力強く話してくれました。



落花生の収穫（10月15日）



「あじさいの手」の皆さん



試作品の「塩茹で落花生」

## 本県農業の将来を担う農業者の育成

～農業短期大学校研修部・有機農業先進地視察研修（会津方部）の実施～

農業総合センター有機農業推進室

9月18日（火）、農業短期大学校研修部の新規就農者研修を受講されている方を対象として、会津方部での有機農業先進地視察研修を行いました。

当日は大変残暑も厳しいなか、7名の受講生が参加されました。

会津方部では先進事例農家として、会津美里町の会津自然塾（代表：鹿野義治氏）、喜多方市の喜多方ゆうきの和（代表：渡部好啓氏）の施設やほ場を見学、各々の代表からこれまでの有機農業への取り組みや現状、これからの取り組み等について説明を受けました。

会津自然塾では、宅配等の取り組みやこれまで苦労した点などのお話を伺うとともに、ほ場を見学させていただきました。

喜多方ゆうきの和でも、有機ほ場での枝豆の作付けや販売、今年の苦労した点などを話していただきました。参加した受講生は、積極的に質問をしながら、真剣にメモを取っていました。

先進的な優良農家での研修とあわせて、会津方部で設置している有機農業実証ほの一つ、湯川村での落花生実証ほを視察し、会津方部での研修は無事終了しました。

受講された皆さんには、将来の本県農業を担う大きな期待がかけられています。



会津自然塾での研修風景①



会津自然塾での研修風景②



喜多方市の渡部氏ほ場前での研修風景



湯川村の有機農業実証ほ（落花生ほ場）での研修風景

## 《コラム》「オーガニック・コットン」で再スタート

オーガニック・コーディネーター 南埜 幸信



新米の収穫が始まり、全袋検査という、日本の農業の歴史始まって以来の事態に、県内が一体となって取り組み、その信頼回復に全力をあげて取り組んでいらっしゃるのと推察いたします。本当に日々ご苦労様です。

そんな中ですが、県内のオーガニックで嬉しい情報が入ってきました。それは今年の震災と原発事故の直後の4月、二本松の有機生産者の方々と無事の再会を確認した会議の時に、「これからどうしていくか」、「はたして農業を続けられるのだろうか」と、自分の身の回りに起こったことすら詳細理解できないまま作付の時期を迎え、どこからどうしようかと相談していたなかで、とにかく畑を耕そうと話し合い、特に放射線量の多めの畑については、食べ物を作るのではなく何か方法はないかと思案したところ、「オーガニック・コットン」の作付はどうだろうかということになり、右も左も後先も判らないまま、とにかく前を

向いて進もうというなかでのコットンの作付が始まりました。

もともと福島県には「会津木綿」に代表されるように、コットンの作付から反物にして出荷するという農業は存在していました。歴史があるのであれば何とかなるということで、収穫後のことなど何も考えずに、ただ前を見た作付でした。何かその先に新しい希望が見えるようなきがしたからかもしれません。

それがその後、福島市でオーガニック・コットンの製造を手掛けられていた「わ田や」の渡邊さんと合流でき、収穫体験教室の受け入れから、紡績そして草木染めとオーガニックの行程を経て、この度福島県産のオーガニック・コットンで作った靴下が完成いたしました。

天然の資材らしく、肌に優しく、風合い良く、柔らかく、温かく、その靴下に手を通したとき、優しい福島 naturally に包まれたような感覚になると同時に、あの4月の会議の時の生産者の方々の顔を思い出し、心の底から込み上げてくる感動がありました。

「わ田や」の渡邊さんから現在、これをきっちりと販売してもらえる売り先と結びつけてほしいという依頼を受けて、私が現在各方面に商談を始めているところです。

福島のオーガニックに、日本初の商品が加わりました。今年もコットンの作付はそのまま続けて頂いています。この動きをきっちり育てていきたいと願っています。

## 《お知らせ》

- 有機農業についての疑問や技術についてのご質問は、有機農業推進室までご連絡下さい。携帯電話、パソコンからアクセスして下さい。

メールアドレス：yuuki\_otasuke\_soudan@pref.fukushima.lg.jp 電話：024-958-1711